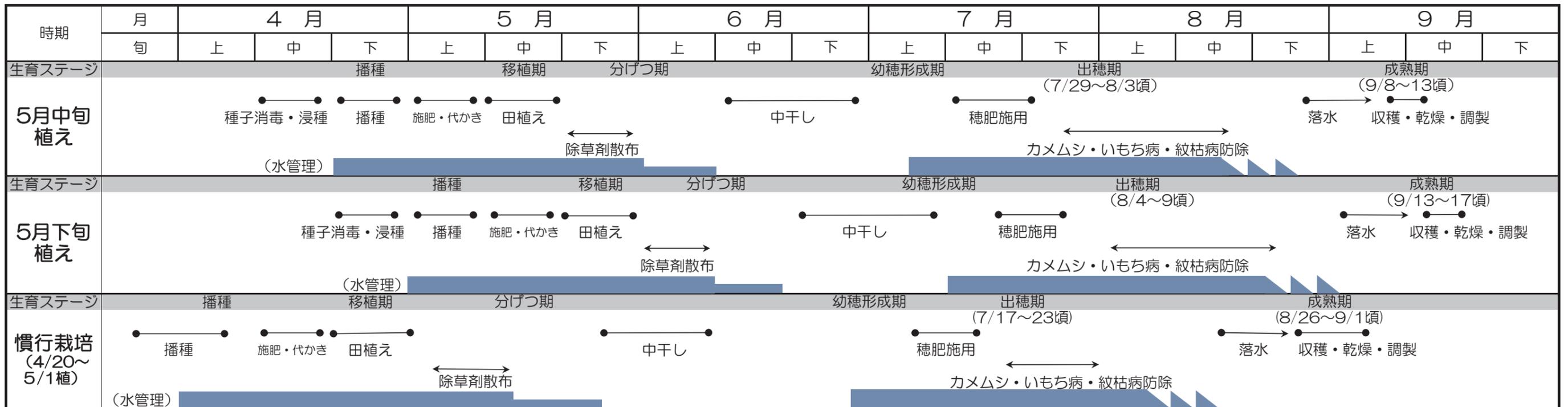


育苗ハウスが不足する場合、育苗回数を増やすことで、必要な苗を確保することができます。しかし、移植時期が遅れますので、用水が確保できるか、栽培前に確認する必要があります。また、用水が確保できても、特に、遅植え「コシヒカリ」では慣行植えと同等の収量を得ようとすると倒伏し、品質も低下しやすくなるため、目標収量を慣行栽培より落とす必要があります。このため、本栽培暦を参考に、倒伏させない、品質を落とさない「コシヒカリ」生産に取り組みましょう。

【栽培のポイント】

- ①育苗管理については、ハウス内の高温に注意し、黄化苗にならないよう短期間で育苗する。
 - ②基肥窒素量は、慣行植えの標準量より10a当たり1～2kg減量(砂質土の場合も同じ)する。穂肥については1.5kg(砂質土の場合は1kg)を上限に減量する。
 - ③栽植密度は、15.0～16.5株/m²(坪当たり50～55株)とし、株間をやや広げる程度に留め、疎植は避ける。また、茎数・穂数を確保するため、植付本数を減らさないようにする。
 - ④5月中旬植えで出穂期が7/29～8/3頃、成熟期が9/8～13頃、5月下旬植えで出穂期が8/4～9頃、成熟期が9/13～17頃となるため、水管理や病害虫・雑草防除管理に注意する(※)。
- ※ 千葉市における出穂期と成熟期



収量と収量構成要素

移植時期	目標収量 (kg/10a)	穂数 (本/m ²)	1穂籾数 (粒)	m ² 当たり籾数 (粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)
5月中旬	480～	300～	90～	30,000以下	80	21.0
5月下旬	510	320	100	30,000以下	80	21.0
慣行	540	400	80	32,000	80	21.0

【10a当たり施肥量の目安(壤質土・湿田)】

移植時期	窒素		りん酸	加里	
	基肥	穂肥	基肥	基肥	穂肥
5月中旬	1.5kg	1.5kg	7～9kg	8kg	3kg
5月下旬					
慣行	2～3kg	3kg	7～9kg	8kg	3kg

★用水の確保

○登熟期間中の用水の不足は、減収や品質低下につながるため、最低でも出穂後25日間の用水確保を図る。

★育苗の注意点

- 短期間で苗は育ち、黄化するため、移植予定日の14～18日前に播種し、計画的に移植作業を進める。
- ハウス内の気温は高くなりやすいため、ハウスは終日開放を基本とする。
- 播種～緑化は、30℃を超える高温になると、苗がやけたり、細菌性の苗立枯病が発生するので、特に温度管理に注意する。

★移植時の注意点

○栽植密度は15.0～16.5株/m²(坪当たり50～55株)、植付本数は4～5本/株とし、疎植は避け、茎数・穂数を確保する。

★雑草防除

- 気温が高く、雑草の発生も早まるため、除草剤の散布時期が遅れないよう注意する。
- シメトリンやシメタメトリン等を含む除草剤は、高温条件で薬害が発生するおそれがあるので、使用を控える。

★施肥の考え方

- 表の施肥量を目安にして基肥を施用し、幼穂形成期の生育量から穂肥施用の有無・時期・量を判断する。
- 砂質土の場合、穂肥窒素量は2～3kg/10aとする。
- 慣行と比べ移植後の気温が高く、全量基肥栽培用肥料の追肥部分に相当する緩効性肥料の溶出が早くなり、倒伏を助長する可能性もある。このため、全量基肥栽培用肥料の使用は控える。

★病害虫防除

- 梅雨時期に分げつ最盛期となり、「いもち病」が発生しやすい。このため、箱処理剤の施用により葉いもちの発生を防ぐとともに、多肥とせず、中干しを適期(茎数250本/m²となったら開始)に行うことにより過繁茂を避ける。また、圃場を小まめに観察し、適期薬剤防除を図る。
- 出穂期前後の高温は「紋枯病」の被害を助長するため、圃場を十分に観察して適期防除を図る。
- 周辺圃場より出穂時期が遅いため、斑点米カメムシ類により集中的に加害される。このため、出穂期～穂揃期と出穂期後15日の2回防除を基本とする。